『建礼門院右京大夫集』における「薄様」

―前半・後半の差異を中心に―

小林賢太

一　はじめに

建礼門院右京大夫は、高倉天皇の中宮・建礼門院徳子に仕えた女房歌人である。彼女の家集『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』と略称）には、宮仕えの日々、資盛・隆信との恋、平家の繁栄と凋落などが描かれる。部立はなく、詞書は長大であり、人生の回想録としての一面が強い。家集でありながら、日記文学的性格が濃い作品と言えよう。

『右京大夫集』は同時代の家集に比べて特異な点が多いが、「薄様」に関する記述が多いことも特徴のひとつである。その数は全十五例、内訳は、和歌を書きつける料紙としての薄様が十二例、郢曲の曲名としての「白薄様」が二例、枕紙としての薄様が一例である。ひとつの家集の中でこれほど「薄様」という語が頻出する例は、管見の限りほかにない。[1] 伊原昭も『右京大夫集』における色紙の記載の多さを指摘し、次のように述べる。[2]

文の贈答、いわゆる消息（その主体は歌であるが）は、平安時代からの歌集の詞書などをみると、さかんに行われたことがわかり、歌が相手におくる品物につけられている場合も少なからずある。しかし、色紙についての記述は、三代集、あるいは三十六人集などにもほとんどみられない。歌集などの場合は詞書の長さなども、おの

ずから制約され、贈る歌の色紙の色にまでは言及されなかったのであろうか。また、歌合などの場合においても、ほぼ同時代のそれにおいてはほとんどみられない。……〈略〉……ただし、時代を下った「建礼門院右京大夫集」には約三六〇首のうちの、一二首の詞書に、色紙の色の記載があった。

伊原が指摘するように、和歌集では料紙の色まで記載する例はそれほど多くない。それよりも、歌そのものの内容や機知に富んだ応酬を書き残すことに重点が置かれている。なぜ『右京大夫集』には、薄様に関する記述が多いのであろうか。本稿では『右京大夫集』における薄様の使用例を検討することで、家集内での薄様の役割を考察し、薄様について詳細に記述された理由を考えたい。

なお『右京大夫集』は、冒頭から高倉天皇の崩御を記す二〇四番までと、平家都落ち以降を描く二〇五番から巻末までとでは、内容的に差がある。元来、上下巻に分かれてはいなかったであろうが、近世以降の版本では一番から二〇四番までを上巻、「寿永元暦などのころの世の騒ぎは」から始まる二〇五番以降を下巻とする本もある。本稿では便宜上、巻頭～二〇四番を前半、二〇五番～巻末までを後半と称して考察を進めていく。

二　「薄様」の作法

まずは薄様そのものについて確認しておこう。薄様とは斐紙（雁皮紙）のうち薄手のものを指し、平安時代の貴族社会においては和歌を書いたり物を包んだり、様々な用途で用いられた。浸染め色紙として珍重され、色とりどりの薄様が作られたと思しい。[3] 先述したように、和歌集における色紙の記述は少ないが、物語や日記などには多く見られ、伊原はその重要性を次のように述べる。

……〈略〉……消息の料紙の色は、その内容、あるいはまた、その場の雰囲気・状況、贈答の人物のあり方に

まで関連をもち、何らかの形で物語などのテーマに関与するに至る場合も生ずる。さらにそれにつれて、用紙の色は文付枝の色彩をも規定する場合がおこると共に、文付枝の方もまた物語のストーリーに適合するものでなくてはならなくなる。このようにして、消息と、それを記す料紙の色と、それを結びつける文付枝の色合とは、それぞれ互に深い関連をもちながら作品の筋にそい、それによって美しく調和された情趣の世界が描き出される。

そして『源氏物語』に登場する色紙と文付枝について詳細に論じている。そのほか、田中仁も『源氏物語』における手紙の色について言及する。[4] 岡田ひろみは『源氏物語』に加え、『宇津保物語』『枕草子』における赤色の手紙の特徴を指摘し、[5] 武藤那賀子は『枕草子』に描かれる手紙の色について論じている。[6] これら先行研究によると、贈答歌における料紙の色と文付枝の色は同系色であることが多く、両者の色を揃えることが一般的な配色の慣習であったらしい。この法則が物語など創作物の中だけでなく、現実の贈答でも同様であったことは、『小馬命婦集』からも推測される。

また、きなるうすやうを、はぎのしたばにえりて、白銀を露におかせて
　をしかたつをのへにしげる秋萩にしたばのうへをしる人のなさ（小馬命婦集・二一）

黄色い薄様は、黄葉した萩の下葉と同色である。その黄色の薄様に銀泥を露に見立てて置いたのであろう。[7] 贈答歌ではないが、「小野宮右衛門督君達歌合」の次の記述においても、料紙とそれを付ける植物を同系色で揃えている。

天元四年廿六日、小野宮故右衛門督のきむだちのわたりよりいできたりけるなぞなぞがたりあはせ
　左は、あをやぎのうすやう一かさねにかきて松の枝に付けて、かくなんありける
　わがことはえもいはしろのむすび松ちとせをへても誰かとくべき
　右は紫のうすやう一かさねにかきて、あふちの花に付けたり
　おくていねのいまはさなへとおひたちてまくてふたねもあらじとぞ思ふ　（小野宮右衛門督君達歌合・一～二）

次の『枕草子』の一文も手紙と文付枝が同色である一例だが、赤色の紙に対する清少納言の美意識も読み取れる。

いみじう暑き昼中に、いかなるわざをせむと、扇の風もぬるし、氷水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様を唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、取り入れたるこそ、書きつらむほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もうち置かれぬれ。（一八三段）

夏の暑い中、真っ赤な紙に手紙を書いてくれた相手の志の深さを思いやっている。このように、赤い紙を書き手の情熱の反映と捉える感覚は、清少納言独自の美的感覚というより、当時の一般的な感覚であった可能性がある。岡田は「清少納言が贈り主ではなく「受け手」の立場での叙述であることからも、彼女独自の美意識というより、当時ある程度共通認識としてあった取り合わせといって良いのではないか」と述べている。後述するが、赤い紙を情熱の表れと見る感覚は『右京大夫集』にも見出せる。

また薄様は文字通り薄い紙であるから、一枚だけでなく、二枚重ねて用いることもあったらしい。『狭衣物語』巻二には東宮から源氏の宮に送られた手紙を次のように描写する。

御文は、氷襲ねたる唐の薄様にて、雪いたう積りてしみ凍りたる、呉竹の枝につけさせたまへり。（二四二頁）

装束における氷襲とは表が白埜（もしくは鳥子色）、裏が白の配色であるが、料紙の場合は二枚重ねにして、白埜色（鳥子色）の紙を上に、白色の紙を下にして重ねたものと思われる。[8] 文付枝として選ばれた呉竹は、それ自体は緑だが、雪がたいそう積もって凍った状態であるから、白と同系色になる。『枕草子』二六〇段には、定子が一条天皇に手紙を書く様子が描かれるが、そこで「御返し、紅梅の薄様に書かせたまふ」とあるのも、表は紅、裏は紫（蘇芳）の紅梅襲の配色を料紙で表現し、上に紅の紙、下に紫（蘇芳）の紙を二枚重ねにしたものではないだろうか。[9] 湯山賢一の指摘によると、薄様を二枚重ねにした実例としては、享禄三年（一五三〇）九月の足利義晴侍女佐子上臈局消息（上杉家文書）が、薄様折紙を二枚重ねにした折紙の遺例として知られているという。

三　前半における「薄様」

それでは『右京大夫集』における薄様の記述を確認していきたい。まず前半における使用例から見ていく。『右京大夫集』で最初に登場する薄様は次の贈答歌である。

八島の大臣とかや、このごろ人は聞こゆめる、その人の中納言と申ししころ、櫛を乞ひきこえたりしを、賜ぶとて、紅の薄様に、蘆分け小舟結びたる櫛挿したるが、なのめならぬに、書きて押し付けられたりし。

蘆分けのさはる小舟にくれなゐの深き心を寄するとを知れ（五九）

返し　白き薄様に書きて

蘆分けて心寄せける小舟ともくれなゐ深き色にてぞ知る（六〇）

五節の折の贈答であり、当時は五節に櫛を贈り合う風習があったらしい。右京大夫に所望され、平宗盛は彼女に櫛を贈るが、そこに恋に擬した贈歌を添えている。その際、宗盛は自身の想いを「紅の深き心」と詠み、それを言葉だけでなく「紅の薄様」で表現して、激しい恋心を示している。先述したように、やはり赤い紙を情熱の具現と捉えるのは、当時の一般的な感覚と見て良かろう。それに対する右京大夫の返歌は、表現上は宗盛に応じているのかいないのか曖昧だが、歌が書かれた料紙は「白き薄様」である。燃える恋心を表した「紅」に対し、「白」で応えている以上、宗盛の想いを受け流したと見るのが妥当であろう。谷知子は右京大夫詠（六〇番）について「鸚鵡返しの歌であり、宗盛に対しては真剣に向き合っていない感を受ける」と述べるが、[10] 首肯すべき指摘であり、「白き薄様」に書かれていることもその傍証となろう。弓削繁もこの贈答歌に対して同様の解釈をしているが、さらに弓削は「白薄様」という歌が五節で歌われていたことから、「右京大夫の、場をわきまえた粋な振る舞いが理解されてくる」と指

摘する。[11] 当該箇所における薄様の白という色は、和歌では表現しきれない言外の心情を表現するとともに、時節を踏まえた対応でもあるからこそ、わざわざ家集に書き記しておく必要があったのである。次の例にも紅の薄様が登場する。

内の御方の女房、宮の御方の女房、車あまたにて、近習の上達部、殿上人具して、花見あはれしに、悩むことありて交じらざりしを、花の枝に、紅の薄様に書きて、小侍従とぞ。

さそはれぬ心のほどはつらけれどひとり見るべき花の色かは（七〇）

内裏の女房や公卿殿上人らが催行した花見に、体調が優れず同行できなかった右京大夫に対して、小侍従から桜の花とともに歌が贈られた。料紙は「紅の薄様」である。先述した通り、紅は熱い思いを表す色である。「あなたと一緒にこの花を見たかったのですよ」という強い思いを紅色で表現したのであろうか。

なお、色紙と文付枝は同系色であることが一般的な配色だが、白に近い桜の花と真っ赤な紅の薄様とでは異なる色の組み合わせになってしまう。しかし「くれなゐにふかくにほへるさくらばなあめさへいろをふりぞしめける」（一条大納言家歌合・二番右・「紅桜」・少将源つねかた）のような歌も存するし、白と紅の配色は「桜襲」（表が白、裏が赤あるいは葡萄）の色目と同じ組み合わせであるから、全く無関係な配色ということではなさそうである。桜に結びつけられた色紙は他にも同系色ではない例があり、考察すべき点が多いのだが、紙幅の関係上、別稿に譲る。次に資盛との贈答歌を挙げる。

とかく物思はせし人の、殿上人なりしころ、父大臣の御供に住吉に詣でて、帰りて、州浜のかた結びたるに、貝どもをいろいろに入れて、忘れ草を置きて、それに縹の薄様に書きて、結び付けられたりし。

浦見てもかひしなければ住の江に生ふてふ草を尋ねてぞ見る（七七）

返し　秋のことなりしかば、紅葉の薄様に

住の江の草をば人の心にて我ぞかひなき身を恨みぬる（七八）

資盛からの和歌は「縹の薄様」にしたためられている。縹色は露草で染めた薄藍色だが、『枕草子』に「つきぐさ、うつろひやすなるこそうたてあれ」（六四段）とあるように、褪せやすい色である。資盛の歌は、添えられた忘れ草と合わせて考えることで、「あなたの薄情さを恨んでも甲斐がないので、あなたのことを忘れようと忘れ草を尋ねました」となり、さらに右京大夫の薄情さを色褪せやすい縹色の薄様で表現していることになるだろう。また和歌とともに貝を入れた州浜を贈っているが、二句「かひしなければ」の「かひ」は「甲斐／貝」の掛詞になっており、贈り物と文付枝と和歌とが見事に響き合い、興趣ある贈答となっている。それに対して右京大夫は「紅葉の薄様」で返歌している。紅葉襲は表が紅、裏が青（もしくは濃い赤）の配色であるから、これと同じ組み合わせで薄様を二枚重ねたのであろう。詞書に「秋のことなりしかば」とわざわざ記しているのは、季節に適した薄様を選んだことを強調しておくためであろう。また先述したように、紅は情熱の色であるから、「移ろいやすいあなたの心と違い、私の方は一途ですよ」と暗に示しているのかもしれない。縹の薄様に書かれた贈歌に、紅葉の薄様で返歌したことについて辻勝美は、「相手と同じ紙の色ではなくて、変化を持たせるということに気を遣った」可能性を指摘している。[12] 相手と全く同じ色は用いないということも、色紙を用いる際の慣習の一つであったのかもしれない。次に挙げるのは時忠との贈答である。

五月五日、宮の権大夫時忠のもとより、薬玉まきたる筥の蓋に、菖蒲の薄様敷きて、同じ薄様に書きて、なべてならず長き根を参らせて、

君が代に引きくらぶればあやめ草長してふ根も飽かずぞありける（八二）

返し　花たちばなの薄様にて

心ざし深くぞ見ゆるあやめ草長きためしに引ける根なれば（八三）

時忠からの歌は、端午の節句に相応しく「菖蒲の薄様」に書かれている。菖蒲襲は表が青、裏が紅梅の配色である。これを菖蒲の根とともに贈ったのは、時節にかなった振る舞いである。対する右京大夫は「花たちばなの薄様」で返歌する。橘は夏の花であり、これもまた季節に合致した名の配色を選んでいる。花橘襲は表が朽葉、裏が青の組み合わせである。これは考えようによっては、時忠から贈られた料紙の色の一枚を取り入れているとも見える。時忠から贈られた薄様は、上に青、下に紅梅の薄様を重ねたものである。時忠が上に重ねた青の薄様と同じ色を右京大夫は下に用い、その上に朽葉の薄様を重ねて返したことになる。贈答歌というのは相手の歌の一部を取り込んで、時に鸚鵡返しのように返歌するが、右京大夫は料紙にもその法則を流用し、相手が贈ってきた二枚重ねの薄様のうちの一枚と同色を用いて返歌したとも考えられる。次に挙げるのは秋の贈答である。

秋の末つ方、建春門院入らせおはしまして、久しく同じ御所なり。九月尽くる、あす還向あるべきに、女官して、葦手の下絵の檀紙に、立てぶみて、紅の薄様にて、

帰りゆく秋に先立つなごりこそ惜しむ心の限りなりけれ（八八）

返し、上白き菊の薄様に書きて、誰と知らねば、女房の中へ、知盛の中将の参られしにことづく。まことに、

世のけしきなごり惜しげにうちしぐれて、ものあはれなれど、

立ち返るなごりを何と惜しむらむ千年の秋ののどかなる世に（八九）

建春門院方から「紅の薄様」が届き、それに対して右京大夫は「上白き菊の薄様」で返歌している。紅の薄様はやはり情熱を表しているのではないだろうか。御所が別々になってしまうことがどれほど名残惜しいと思っているか、その思いの強さを紅色で表現したのであろう。そして右京大夫が返歌に用いた「上白き菊の薄様」とは表が白、裏が紫（もしくは萌黄）の菊襲の配色で薄様を二枚重ねにしたのであろう。紅の紙の返事に対して素っ気ない白い紙で返しては、前掲五九・六〇番の宗盛との贈答同様、情熱をはぐらかしたと解釈することもできてしまう。だが右京大夫

が用いた料紙は、上に白、下に紫（萌黄）の薄様を重ねた菊襲の料紙である。菊は秋の花であると同時に、長寿を象徴する花である。紀友則は「露ながらをりてかささむきくの花おいせぬ秋のひさしかるべく」（古今集・巻第五・秋歌下・二七〇）と詠み、俊成卿女は「をる人の老いせぬ秋の露の間に千とせをめぐる菊のさかづき」（宝治百首・一八七五）と詠んだ。「千年の秋ののどかなる世」を讃える右京大夫の歌に、長寿を寿ぐ菊は最適な花であるからこそ、菊襲の薄様を用いたのであろう。時節に相応しいと同時に、歌意にも最適な配色を選んだことになる。次の維盛の妻との贈答も、秋に相応しく紅葉にまつわる薄様である。

三位中将維盛の上のもとより、紅葉に付けて、青紅葉の薄様に、

君ゆゑは惜しき軒端のもみぢをも惜しからでこそかく手折りつれ（九〇）

返し　紅の薄様に

我ゆゑに君が折りけるもみぢこそなべての色に色添へて見れ（九一）

青紅葉は表が青、裏が朽葉（もしくは萌黄）の襲色目であるから、ここでは上に青い紙、下に朽ち葉（萌黄）の紙を重ねたのであろう。紅葉に結びつけるに相応しい名の色であると同時に、その名に青は付くものの、折りたたんで紅葉に結びつけると朽葉色が表に出るから、料紙と文付枝とは同系色になる。一方、右京大夫の歌は「紅の薄様」に書かれている。「あなたのためならこの紅葉も手折るのも惜しくはない」と詠ずる維盛室に対し、右京大夫は「あなたが私のために手折ってくれたこの紅葉こそ、普通の紅葉の色よりさらに色を増してすばらしく見えます」と返している。「なべての色に色添へて」とあるように、右京大夫の返歌は維盛室が贈ってくれた紅葉の美しさを詠じており、料紙の紅色はその素晴らしい紅葉の色を表しているのであろう。また、「あなたの熱い思いを私は受け止めていますよ」と相手の情熱を認め、なおかつ右京大夫自身の熱く感謝する気持ちを表そうとしたとも考えられる。

以上の例の細かな詠歌年次は不明であるが、貴人と盛んに交流している様子からは、出仕中のことのように思われ

る。また『右京大夫集』において作者が宮中を離れたことが明記されるのは、一二四番歌の詞書「心ならず宮に参らずなりにしころ」であるが、ここまでに確認した薄様の例は全て一二四番歌より前であり、少なくとも家集内部の時間の流れの中では出仕中の贈答のように読める。『右京大夫集』前半に登場する薄様は、色とりどりの鮮やかなもので、時に櫛や州浜の貝、菖蒲の根などを伴う典雅な贈答に用いられていた。薄様は情趣溢れる贈答を演出するために、重要な役割を果たしているのである。なお宮中を退いたことを示す一二四番歌の直前にも薄様が登場するが、これまでの例のような華やかな贈答歌ではなく、枕紙である。

いと久しくおとづれざりしころ、夜深く寝覚めて、とかく物を思ふ、覚えず涙やこぼれにけむ、つとめて見れば、縹の薄様の枕のことのほかにかへりたれば、

移り香も落つる涙にすすがれて形見にすべき色だにもなし（一二三）

かつて資盛から贈られた七七番歌と同じく「縹の薄様」の枕紙である。資盛の訪れが間遠となった頃、物思いに耽ってふと見れば、色褪せた縹の枕紙があった。流す涙で移り香も色も褪せてしまったことを嘆く歌と、色褪せた縹の薄様が響き合う。

以上のように、枕紙としての薄様である最後の例を除くと、『右京大夫集』前半の贈答歌に用いられた薄様は、言外の心情を上手く表現したり、贈り物や文付枝と巧みに響き合ったり、季節に適した名を持つ配色であったりと、貴人との風雅な贈答を演出する上で重要な役割を果たしていた。だが後半に至ると、その様相は大きく異なる。

四　後半における「薄様」

それでは『右京大夫集』後半における薄様を確認していこう。平家の都落ちに関する記述から始まる後半で、薄様という語が登場するのは次の二～三例のみである。

五節のころ、霜夜の有明に、宮の御方の淵酔にて、白薄様などの声聞こゆるにも、年々聞きなれしこと、まづ覚えざらむや。

霜さゆる白薄様の声聞けばありし雲居ぞまづ覚えける（三二四）

一つ目は、作者が後鳥羽天皇のもとへ再出仕した後の記事であるが、ここでの「白薄様」は紙ではなく、曲名である。『平家物語』巻一「殿上闇討」には次のようにある。

五節には、「白薄様、こぜむじの紙、巻上の筆、鞆絵かいたる筆の軸」なんど、さま〴〵面白き事をのみこそ歌ひ舞はるるに、……〈略〉……（二三頁）

郢曲「白薄様」は五節に歌われる歌であり、徳子に仕えていた頃の右京大夫は何度も宮中で聞いていた。再出仕後の宮中で再度この曲を聞いた右京大夫は、かつて平家全盛期に宮中で聞いた「白薄様」を思い出し、過去を懐旧している。ここでの薄様は、失われた過去を思い出すよすがとして機能している。さらに次の贈答も五節の時分の記録であり、「白薄様」が登場する。

大宮の入道内大臣失せられたりしころ、公経の中納言かき籠りて、五節などにも参られざりしに、白薄様の、いろいろの櫛を描きたるに書きて、人のつかはししに代りて、

迷ふらむ心の闇を思ふかな豊の明りのさやかなるころ（三三三）

返し

かきこもる闇もよそにぞなりぬべき豊の明りにほのめかされて（三三四）

実宗が没した頃、その子公経への弔問歌を代作した折の記述である。ここでの「白薄様」は料紙としての薄様である。先述したように「白薄様」は五節に歌われる曲名でもあり、櫛を贈り合うのは五節の風習であるから、櫛を描いた白薄様の料紙は五節の時節に相応しい。また和歌では「闇」と「明り」が対比されているが、紙の色である「白」

もまた「闇」と対比する。時節をわきまえ、歌意にも相応しく、それなりに気の利いた色を選んでいるのだが、上巻のような華やかな贈答とは言い難い。かつて五九・六〇番の平宗盛との贈答では、「紅」と「白」の鮮やかな対比で王朝物語さながらの戯れの恋を楽しんでいたが、ここでは打って変わり、「黒」と「白」の対比で故人の死を悼む歌を詠んでいる。なお三三四番の公経の返歌の詞書を、「返し、薄鈍の薄様に」とする諸本もある。[13] 鈍色は喪服の色であるから、弔問の返歌として相応しい。

このように、上巻であれほど色鮮やかに描かれていた薄様は、下巻ではたったの二箇所、諸本による異同を入れても三箇所のみである。そのうち一つは料紙ではなく郢曲の「白薄様」であり、内容もかつて平家全盛時代に歌われた「白薄様」を懐かしむものであった。もう一つの白薄様は料紙としての薄様であり、時節や歌の内容にも相応しいのだが、哀傷歌を書き付けて弔問している。さらに諸本によってはその返歌が書かれた薄様の色を薄鈍と記すものもあるが、これも喪を表す色である。いずれも前半に登場した色鮮やかな薄様とは異なり、もの悲しい場面を演出している。辻勝美も、「贈答歌の料紙に関する記述は、前半部には比較的多くみられるもので」、「そこでは王朝の物語世界さながらの雰囲気を醸し出していて印象的である」と指摘し、後半との差については、「両者の描く世界は対照的といえよう」と述べる。[14]

本稿で見てきたとおり、前半での薄様は、宮中での風雅な贈答を演出する色鮮やかな薄様がほとんどであったが、後半での薄様は、失われた過去を懐旧したり、弔問歌を書き付けたりしており、両者には歴然とした差があった。だが平家滅亡後においても、貴族社会では色とりどりの薄様が贈答歌に用いられていたはずである。また後鳥羽天皇に再出仕し、再び宮中に身を置いた右京大夫は、色鮮やかな薄様を用いた贈答歌を宮中で目にしていたことであろう。蓋し、前半後半の間に存する薄様の扱いの差異は、右京大夫が意図的に用いた表現技法ではないだろうか。

『右京大夫集』における色彩豊かな薄様は、平家健在時の平穏で典雅な宮中を象徴する景物であり、情趣ある贈答

歌を演出する存在であったと考えられる。だからこそ、前半では色鮮やかな薄様の描写が繰り返され、王朝物語さながらの典雅な贈答を詳細に書き記したのであろう。しかしやがて平家は滅び、資盛をはじめとした平家ゆかりの人々は、死没するか変わり果てた姿となってしまった。かつての秩序は失われ、右京大夫が過ごした理想的な宮中はもはや存在しない。この大きな喪失を表現するために、平家凋落後を描く後半においては、色とりどりの薄様が排除されたのであろう。艶やかな薄様は平家全盛期の王朝的世界を描いた前半にこそ相応しい景物であり、戦乱によって変わり果てた後半世界からは除かれるべき対象なのである。家集末尾（三六〇・三六一番詞書）で右京大夫は、定家に「いづれの名をとか思ふ」と問われ、「その世のままに」と答えて「建礼門院右京大夫」を自身の名として選んだ。彼女にとって自らのアイデンティティの拠り所は、平家健在時の平穏で典雅な宮廷生活であったのだろう。後半に色鮮やかな薄様がひとつも存在しないのは、理想的な時代の喪失を描くための意図的な手法と言えよう

五　おわりに

以上のように、『右京大夫集』における薄様は単なる情景描写ではなく、詞書や歌だけでは表現し尽くせない言外の心情を表し、贈答において重要な意味を持っていた。また前半で描かれる色とりどりの薄様は、平家全盛期の王朝物語的世界を演出する役割があり、後半で鮮やかな薄様の描写がひとつも存在しないのは、理想的な時代の喪失を表現するためであったと考えられる。そして前半後半の差異を表現する素材として薄様が選ばれたのは、右京大夫が普段から紙に対して人並み以上に関心を寄せていたからではないだろうか。『右京大夫集』には料紙としての薄様の描写が十数回あるが、そのうち半分は相手から贈られた薄様、残りの半分は右京大夫自身が贈った薄様である。自分が受け取った歌ならば手元に保管されているだろうが、自分が贈った歌は手元に残らず、どのような紙に書いたかは余

程記憶が確かでなければ書き残せない。おそらく右京大夫は歌を贈る際、自詠を控えておくとともに、その歌を書き記した薄様の色などについても必要に応じて記録しておいたのであろう。これほど料紙に執着した理由の一つには、彼女の育った環境が関係しているのではないか。

右京大夫の生家は、藤原行成の流れを引く入木道の名家・世尊寺家であり、父の伊行も能書家として名高い。伊行の著した書論『夜鶴庭訓抄』が娘に託した書であることは著名だが、[15]その中で「某ガ子トテ内院ヨリ書ケト仰セラルマジ」、「コト女房ニヒキカヘタル事ニテハ候ハムズレ」と、宮中に出仕する娘を意識したと思われる記述がいくつかある。おそらく書を託された娘とは右京大夫のことであり、宮仕えに際して入木の家の娘としての心得を与えられたのであろう。父から薫陶を受けた右京大夫が世尊寺家に対する家門意識を有していたことは、『右京大夫集』の記事からも分かる。次に挙げる七九番には、能書家であった父伊行への意識が見られる。

太皇太后宮より、おもしろき絵どもを、中宮の御方へ参らせさせたまへりし中に、昔ててのもとに人の手習ひしてとて、詞書かせし絵の交じりたる、いとあはれにて

めぐりきて見るにたもとを濡らすかな絵島にとめし水茎の跡（七九）

太皇太后宮多子から中宮徳子のもとへ贈られた絵の中に、右京大夫の父伊行が絵詞を書いたものが混じっていたらしい。父の書にまつわる思い出を書き残したのは、能書家であった父を、そして入木道の名家である生家を顕彰するためであろう。

また三五六～三五八番歌には、俊成の九十賀において右京大夫が法衣に歌を刺繍する記述がある。[16]久保田淳が「袈裟に糸を置くのは余人のなし得ぬ大役で、入木道の名誉にはちがいなかった」と注するように、これも能書家の娘としての名誉を書き残そうとしたのであろう。また二五二番歌には書家の娘らしい感性が垣間見られる。

……〈略〉……空を見上げたれば、ことに晴れて、浅葱色なるに、光ことごとしき星の大きなるが、むらも

なく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に、箔をうち散らしたるによう似たり。……〈略〉……月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる（二五二）

星空を箔を散らした縹色の紙に例えるのは、日頃から紙への強い意識があってのことであろう。新村出も当該箇所について、「紺紙に箔を散らした様だと形容したのも、書道の家に生まれた彼女として、始めて意味のある文句であつた」[17]と述べる。

おそらく右京大夫は入木道の家に生まれたことを強く意識していた。また、俊成の九十の賀で法衣に歌を刺繍する大役を与えられたことを考えると、周囲もそうした働きを期待していたと思しい。自他ともに能書家の娘として認識していたからこそ、日々の振る舞いでも料紙に気を配り、贈答歌に用いた薄様の色まで詳細に記録していたのではなかろうか。そして『右京大夫集』を編む際、色とりどりの鮮やかな薄様を、王朝的物語世界を描く前半には頻繁に登場させる一方、そうした理想的世界が喪失した後半からは意図的に排除したと考えられる。家集内に頻出する薄様の描写は、能書家の娘としての感性と自意識の表出とも言えよう。

注

（1）新編国歌大観・新編私家集大成で「薄様」を検索すると、『右京大夫集』成立以前の勅撰集・私家集・歌集などにおける使用例は、合わせて二十例ほどしかない。

（2）伊原昭『平安朝文学の色相―特に散文作品を中心として―』「色紙と文付枝の配色」（笠間書院　一九六七年）。以下、引用する伊原論文は全て当論文に拠る。

（3）久米康生『和紙文化研究辞典』（法政大学出版局　二〇二二年）。湯山賢一『古文書の研究―料紙論・筆跡論―』（青史出版　二〇一七年）。以下、引用する湯山論文は全て当論文に拠る。

（4）田中仁「色々の紙の手紙―『源氏物語』における―」（『親和國文』二二　一九八七年十二月）。

（5）岡田ひろみ「〈赤〉色の手紙―『うつほ』『枕草子』と『源氏物語』―」（『文學藝術』三四　二〇二年二月）。以下、引用する岡田論文

は全て当論文に拠る。

（6）武藤那賀子「『枕草子』の手紙考」（『学習院大学人文科学論集』二一　二〇一二年）。

（7）藤本一恵・木村初恵『深養父集・小馬命婦集全釈』（風間書房　一九九九年）。

（8）小町谷照彦・後藤祥子『新編日本古典文学全集29　狭衣物語』（小学館　一九九九年）には、「鳥の子を二枚重ねたもの」とある。

（9）襲の配色に関しては、長崎盛輝『かさねの色目　平安の配彩美』（青幻舎　二〇〇一年）、吉岡幸雄『王朝のかさね色辞典』（紫紅社　二〇二二年）など参照。

（10）石川泰水・谷友子『和歌文学大系23　式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』（明治書院　二〇〇一年）。

（11）弓削繁「古文解釈の視点―生きた読みをめざして―」（『教師教育研究』六　二〇一〇年三月）。

（12）辻勝美「中世女流日記文学と手紙」（『語文』九二　一九九五年六月）。

（13）群書類従本ほか。

（14）辻勝美・野沢拓夫『中世日記紀行文学全評釈集成1　建礼門院右京大夫集』（勉誠出版　二〇〇四年）。

（15）永田徳夫『新釈『夜鶴庭訓抄』（一）』（『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』六三　二〇一四年二月）、『新釈『夜鶴庭訓抄』（二）』（『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』六四　二〇一五年二月）ほか。『夜鶴庭訓抄』引用も永田論文に拠る。

（16）久保田淳校注『新編日本古典文学全集47　建礼門院右京大夫集　とはずがたり』（小学館　一九九九年）。

（17）新村出『南蛮更紗』（改造社　一九二四年）。

※『建礼門院右京大夫集』『枕草子』『狭衣物語』『平家物語』の引用は、小学館新編日本古典文学全集に拠る。私家集の引用は『新編私家集大成』、その他の和歌は『新編国歌大観』に拠る。